

看護への期待

学校法人慈恵大学 理事長 阿部 正和

第20回日本看護研究学会総会の開催を心からお祝い申し上げます。この記念すべき学会にお招きいただき、皆様にお話する機会を与えられましたことは、まことに光栄なことであり、吉武香代子会長、前原澄子座長をはじめ関係の皆様へ厚くお礼申し上げます。

始めに

まず始めに申し上げたいことは、ルース・ジョンストンさんの詩のことであります。それは、「聞いて下さい看護婦さん」という題になっております。すでにお聞きになった方も多とは思いますが、本日の話のいとぐちとして申し上げることにいたします。

ジョンストンさんは、アメリカ南部のニューオリンズの看護婦さんであります。この詩は昭和46年（1971年）アメリカの看護の雑誌に発表されました。

『ひもじくても私は自分で食事ができません。

あなたは私の手の届かぬ床頭台の上に私のお盆を置いたまま立ち去りましたね。

そしてあなたは看護のコンファレンスでは私の栄養不足を議論されました。

私はノドがカラカラで困っていました。

でもあなたは忘れていましたね。

付添いさんに頼んで水差しに水を満たしておくことを。

後であなたは看護記録につけました。私が流動食を拒んでいますと。

私は寂しくて恐いのです。

でもあなたは私を一人ぼっちにして去りましたね。

私がとても協力的で全く何も尋ねないものだから。

私はお金に困っていました。

あなたの心の中で私は厄介者になりました。

私は1つの看護的問題として扱われました。

あなたが議論したのは私の病気の理論的な根拠です。

私を診ようとさえなさらなかった。

私は死にそうだと思われていました。

私の耳が聞こえないと思ってあなたは同僚にしゃべりましたね。

「今晚デートの前に美容院を約束したので、勤務の間に死んでほしくないわね」と。

あなたには教育があり、立派に話をし、純白のピンとした白衣をまもって、本当にキチンとしておられます。

私が話すとき聞いてくださるようですが、耳を傾けておられないのです。

助けて下さい。

私に起きている事を心配して下さい。

私は疲れきって、寂しくて、本当に恐いのです。

どうか私に話しかけて下さい。

手を差しのべて私の手を取ってください。

私に起きている事をあなたにも大事な問題として考えて下さい。

どうか聞いて下さい。看護婦さん。』

こういう内容のものであります。この詩は、患者と看護婦の関係の悪い面を、皮肉たっぷりに、しかも巧

みにうたっていることに私は感心し、また反省もさせられました。こういう詩をお聞きになって腹を立て、お怒りになる方も少なくないと思います。「私は違う、日頃患者さんの為に自らを犠牲にして奉仕している。それなのにこんなにひどい事を言われたのではたまらない」と、批判的な見方をされる方もおありでしょう。しかし、この詩にうたわれている場面が全くないと自信を持って言い切れる方は何人おられるでしょうか。胸に手を当てて、冷静に、そして謙虚によく考えてみると、私達の日頃の行動のなかに反省すべき点がある事を思いうかべるのではないのでしょうか。この機会にもう1度自分達の日頃の看護の在り方を考え直してみることも決して無駄なことではないであります。

ジョンストンさんの詩では、看護婦の言葉や行動、それがいかに重要であるかがよく示されており。特に患者さんとの対話、患者さんに語りかける言葉の重要性が、誠によく言い表されていると感心したのであります。勿論これは何も看護婦だけに限った事ではありません。医師をはじめとする、医療に携わる全ての人達が、この詩を聞いて思い当たる節があるのではないかと思います。お互いに深く反省して、もっともっと謙虚になって、医療における態度や言葉の重要性をお互いに再認識したいものと思います。

看護とはどういうことか

看護とはどういうことでしょうか。人によって考え方や意見は様々でありましょうが、私自身は次のように考えております。

看護とは、患者に対して、体系づけられた看護学に支えられたケアをすることである。ケアとは、いつも患者の立場に立って、患者の言うことによく耳を傾け、患者と共に考え、患者が今何をしてほしいかをよく理解し、その事を具体的な看護の技術として、心豊かな言葉と態度をもって患者にしてさしあげることである。

以上が看護についての私の考え方であり。この考えのなかで、3つの点を特に指摘しておきたいと思っております。

その第1は、看護は看護学に支えられたアートであるということであり。看護の技術の基礎となる、サイエンスとしての看護学を生涯にわたって学び続けることが必要であり。学問を基礎に持たない

看護の技術、それは吹けば飛ぶような砂上の楼閣に等しいといつてよいかと思つて。

第2は、いつも患者の立場になり代わつて考えてみるということであり。つまり、視点をかえてみるということであり。言うは易く行ふのは難しいかもしれません。しかし患者が今何を考えているのか、何に不安や悩みをもっているかを察するだけの、豊かな感性が看護婦には求められているのであります。

第3は、心豊かな言葉と態度でケアすると申しました。看護婦は言葉を使う専門職であります。柔らかい物腰で、時にほほえみをたたえて、わかりやすい、やさしい言葉で患者に語りかけていただきたいというのが私の願いであります。

専門職としての看護婦

看護婦は、言葉を使う専門職であると申しました。専門職（プロフェッション）とは、いったいどのような条件を備えたものをいうのでありましょうか。これにもいろいろな意見がありましょうが、私は専門職のもつべき条件として、次の5項目を考えております。

第1は、使命感を持つということであり。私の人生は、自分の幸せの為というよりもケアする患者の幸せの為である、そういう使命感を持つ事が第1に必要な条件であります。

第2は一般教養を豊かに持たなければなりません。専門の看護学を知っているだけではだめなのであります。それ以外の一般的な学問—心理学にしても、哲学にしても、宗教にしても、一般的な学問を学ぶ事が必要であります。

第3は、公の免許を持たなければなりません。勝手に専門職を営むことはできません。公の免許を持つためには、長い修練期間が必要であります。

第4は、生涯にわたつて学び続ける職業、それがプロフェッション。生涯教育が専門職の大事な条件であります。

そして第5に、公益的なサービスである。決してトレードではありません。商いではないという事であり。ます。

以上の5つの条件を備えた者が、専門職（プロフェッション）であると考えているのであります。

看護婦および医師は、まさに代表的な専門職であるといふべきであり。ます。

看護と愛

看護は、病人の苦しみや悩みをよく聞いてあげて、病人と共に考え、共に悩み、共に歩んで、その悩みや苦しみから解放してあげる、そういう素晴らしい仕事であると思うのであります。看護婦としての生き甲斐の1つ、それは愛の気持ちを持って、患者に尽くす、愛の気持ちで人の為に尽くす、これが生き甲斐ではないでしょうか。この場合の愛とはキリスト教というアガーベであります。人間愛といっているかもしれません。

愛は、医療の基本的な精神であると言えます。愛は希望であり、どのような環境にも耐え得るものであります。愛は全ての徳のなかで最も尊いものであります。私達の医療が愛と共にある時、医療の未来は光輝くことであります。この愛の典型的な表れ、それが看護であると私は確信しております。

現在、看護婦の勤務体制や待遇には大きな問題があります。看護婦という地位が病院の中でも、また社会一般からみても低すぎるなど、数えあげれば問題は少なくありません。しかし私は敢えて申し上げたいのであります。多くの難しい局面に耐えて、素晴らしい愛の看護の技術を発揮していただくことによって、いつかは希望の光が必ずや差し込んでくることであります。20年前よりは10年前、10年前よりは今の方が、看護に対する世の中の評価は確かに高くなってきております。それはお年を召した方々にはよくおわかりになる事だと思っております。

将来に明るい希望を持って、患者さんの為に素晴らしい看護の道を歩んでいただきたいと思います。それは皆さん方自身の為であり、またこれから看護の道を志す後輩の為でもあり、結局は、その事が患者の為となり、ひいては、我が国の医療の質を向上させる方向であると思っております。

看護のアートとは

看護は単なるサイエンスではなくて、サイエンスによって支えられているアートであると申しました。もちろん、看護学がサイエンスである事に異存はありません。そして皆様方が適切な看護の技術を発揮する為に、その支えとなるサイエンスとしての看護学が必要となってくるのであります。看護婦は生涯にわたって

看護学を学び続けなければなりません。しかし、看護は看護学のみによって成り立つものではありません。私達の前にあるのは病気そのものではなく、病に悩み、病に苦しむ人間であります。私達と同じ人間であることを考えれば、その事はよくおわかりいただけます。ここに看護のアートというものが必要になってくるのであります。

アートとしての看護。この場合のアートとはどういう意味でありましょうか。字引をひいてみますと、アートは芸術とか技術という訳語がみつかります。しかし、私が看護のアートという時のアートは、単に看護の技術、英語でいうスキルであります。この看護の技術だけを意味しているわけではありません。看護のスキルを発揮するために必要な看護の心、その看護の心も含めて私はアートと呼びたいのであります。看護のスキルと看護の心。これが看護のアートであるといえましょう。

しからば、看護の心とは一体どういうことでありましょうか。大変難しいことではあります。しいてまとめてみれば、次のようになるのではないのでしょうか。

第1は、患者の悩みや苦しみに共感する心。共に感じる心。

第2は、患者にいたわりの手が自然に出る心。意識しないで自然にいたわりの手が出る、そういう心。

第3に、患者にサービスする心。奉仕する心。

つまり、共感。いたわり。奉仕。この3つをもって私は看護の心としているのであります。一言でいいなさいといわれれば、キリスト教でいう“愛”，仏教でいう“慈悲”，そういう事ではないのでしょうか。

いずれにしても“愛”は看護の基本的な精神であります。看護は“愛”であり、“愛”は希望でもあります。

患者とのコミュニケーション

医療における患者とのコミュニケーションについて一言ふれておきましょう。特に申し上げたいのは、言葉の重要性ということでもあります。看護する者が患者との間に信頼関係を築くためには、看護のアートを発揮する事が必要だと申しました。それがためには、まず患者との間に良いコミュニケーションをはかる必要があります。その媒体としての言葉、これが重要であります。

患者に話かける言葉のなかに、温かい、豊かな看護の心が込められているように努力していただきたいのであります。乱暴な言葉を使えば患者は心を閉じます。時には敵意を抱くことさえあります。豊かな心で患者に話しかければ、患者は必ずや心を開いてくださることでありましょう。そして自分についての全ての事を看護婦や医師に話すに違いありません。

作家の吉村昭さんが書かれたものに「お大事に」という題の随想があります。吉村さんは若いとき肺結核のために胸郭成形術を受けられました。その手術をしてくださった先生にたまたま名古屋の駅頭でばったり出合いました。すると先生は吉村さんに向かって、「ああ吉村君、元気であるか、良かったね。」そこへ発車のベルが鳴りました。先生は急いで列車に乗りました。そしてその時、その先生が「お大事に」と一言いわれました。その「お大事に」という言葉が今でも吉村さんの鼓膜の奥にこびりついていて離れないという随想であります。

「お大事に」。全く当たり前のことであります。この「お大事に」という簡単な呼びかけ、それが医療人と患者との間に良いコミュニケーションをはかる上で、まず大事な事ではないかと思うわけであります。

また、名優の森繁久弥さんが病気で入院されました。その入院された時の印象を、「目の位置」という題で随想を書かれました。それをちょっと読みあげてみましょう。

『子供の絵を見ると、鼻の穴ばかり大きな変な顔が描いてある。あれは下から上を見上げる子供達の観察のせいではないだろうか。

まず、婦長が病室にきて、やがて「回診ですよ」と告げる。院長はいささか重々しく入ってきたが、それもたくさんのお供をひき連れてのご来光である。不思議なことに、院長は何を急いでいるのか、立ったままで、死も近い患者に向かって

「どうですか、おかげんは。」

「はい、まあ、少し。」

「もうちょっとたてば薬も効いてきましょう。」

「先生だいじょうぶでしょうか。」

「大丈夫ですよ。ではお大事にね。」

それだけ言ってさっさと立ち去ってしまったのである。ぞろぞろついてきた若い医師も看護婦も何ということもなく出ていった。

続いて、部屋の看護婦が入ってきた。これも決して座らない。規則でもあるのだろうか。そそくさと仕事みたいな事をして「頑張ってくださいね。気の持ちようですよ。」と、少し哲学的な事を加味して、結局は部屋を出ていった。

続いて、家の者が入ってきた。それが妻であり、夫であり、子であり、また兄弟でもあった。この連中はベッドの横に座った。視線も低く、患者の目の位置である。患者は何よりもまず気持ちが落ち着いていた。

「どう、気分は。」

「うん」

「楽になったの？ 薬は効いてきたの？」

「いやーどうだかな。」

「お医者って何を言っているのかしらね。」

「いや、だめだと思ったらあんなもんだよ。」

座った連中の態度はどこか真実味があふれている。皆がそうだとは言わないが、だいたいこんなのが多いようだ。医はビジネスではない。対峙する病人との交流の態度が、顔色が、つまり温かい心が肝要だと、私はつくづく思いあぐねるばかりであった。』

医師や看護婦の目と患者の目の位置がコミュニケーションをはかる上で重要なものであることを示唆した随想だと思いました。

チーム医療の必要性

最後にチーム医療の必要性について申し上げます。今さら申すまでもありません。医療は医師だけでできるものではありません。医師を支えてくれる各種の医療職種の方々の支えによって成立するものであります。

私たちの大学、慈恵医大を創立した高木兼寛先生は、明治の初めの時代に、「医師と看護婦は車の両輪である」という言葉を残されました。素晴らしいと思います。当時は、看護婦はお手伝いさんにすぎませんでした。教育もありませんでした。これではいけないということで、高木先生は看護婦教育所を明治18年に設立されたのであります。あの時代に、「医師と看護婦は車の両輪である」という言葉を残された事は、先生がいかに偉大な人物であったかをよく示していると思います。

医師の方々には、もっと謙虚になって、看護婦さんをはじめ医療を支えてくれるコ・メディカルの方々に対しても感謝の気持ちをもってほしいと思うのであり

ます。また一方、看護婦さん方には、もっともっと勉強していただいて、医師と共通の言語で会話ができるようになっていただきたいと願うものであります。

おわりに

今日は色々とお話をしてまいりました。結局申し上げたかった事は次の4つのことであります。

第1に、進歩発展するサイエンスとしての看護学を生涯にわたって学び続けていきたいと思います、生涯教育のことにふれました。

第2に、看護はサイエンスによって支えられたアートであると申しました。看護のアートとは、看護の技術プラス看護の心である。そして看護の心とは、共感、慰め、そして奉仕。この3つであります。キリスト教

でいう“愛”，仏教でいう“慈悲”と言ってもよいであります。

第3に、患者との対話、言葉の重要性を、もう1度ここで考えてみましょうと申し上げました。医師や看護婦は言葉を使う専門職であります。

そして第4に、医師は看護婦に対して常に感謝の気持ちを捧げ、看護婦は今より一層勉強して、医師と同じ言葉で対話のできる日が1日も早く来るように、ということをお願いしたつもりであります。

皆さんはどうぞ御自分の置かれた位置を十分に認識されて、今後共、看護の学、看護の術、そして看護の道の3本柱を目指して、研鑽され、看護学の研究に従事されることを祈って止みません。

御静聴ありがとうございました。